

報告事例－4

森林環境教育（森林E S D）プログラム分析シート

プログラム名：「児童と地域住民をつなぐ森林環境教育活動をめざして」		下松市立米川小学校 米川地区教育造林振興会
(1) プログラムの目標	・地域の身近な自然環境に親しませる。 ・児童と地域住民との関わりを深める。 ・地域と学校の協働による環境教育活動の方策を検討する。	
(2) プログラムの概要	下松市立米川小学校は周囲を山に囲まれた全校児童15名の小規模校である。約9haの学校林を所有するとともに、“米泉湖緑の少年隊”として「総合的な学習の時間」を中心に環境学習や身近な地域の環境保全活動に取り組んでいる。 本プログラムは、学校林を始めとする学校や地域の特色、自然環境を生かした体験的な活動を行うことにより、自然の恵みや地域の人々の支えに感謝し、自然や人に学ぶ態度を育むことを目的とするものである。	
(3) プログラムの展開		
活動内容について、プログラムの流れで、記載する。 合わせて、段階的な学びとして、3つのタイプのアクティブ・ラーニング（in、about、for）の視点で活動内容を区分してみる。 ・in（～の中で）－ 体験、観察、製作など（関心・意欲、知識・技能） ・about（～について）－ 情報収集・分析、情報交換、討論など（知識・技能、思考・判断・表現） ・for（～のために）－ 提案、実践など（態度、参加・行動）		
時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
	in、about、for の視点で活動内容を区分	
7.5	山菜採り遠足（4月）	
	全校児童と保護者、地域住民で学校から5km離れた西谷学校林に出かける。 学校林では防火標語の取り付けや枯れ枝の片付け等の整備を行う。 周辺の休耕田に自生する山菜の採集や、事前に採集した山野草の名前を当てるクイズを行う。 高学年は山頂の史跡の見学、低・中学年はノコギリで丸太切り体験を行う。	事前に教員と教育造林振興会理事とで下見を行い、危険箇所等の把握を行う。 児童は縦割り班で行動し、上学年が下学年の世話をする。 行き帰りの山道で見られる動植物の説明を自然観察指導員が行う。 山野草は理事が事前に採集、名前当てクイズや丸太切り体験は理事が指導し、教員や保護者が補助につく。 各学年で事前・事後の指導を行う。
	in 身近な地域の春の自然に触れるとともに、学校林の管理・維持への関心を高める。	
1	山菜を味わう会（4月）	
	地域で採れた山菜を天ぷらにして給食に添え、教育造林振興会理事と自然観察指導員を招いて一緒に食べながら交流する。	コゴミやタラの芽、ウドなど地域で採れる山菜について紹介する。 進行は児童が行い、理事は各テーブルに分かれて入る。 食後に児童が感想やお礼の言葉を発表する。
	about お世話になった人とふれあいを深め、地域の自然や人への感謝の思いを表現する。	
2	栗拾い（10月）	
	学校に近い中原学校林で栗拾いを行う。 栗は教員と児童で下処理を行い、栗ごはんとして給食で試食する。	事前に教員と造林振興会理事とで下見を行い、理事を中心に草刈りを行う。特に、イノシシの痕跡、スズメバチの巣などがいないか確認しておく。 傾斜が急な箇所もあるため、児童にはヘルメットを着用させ、安全管理に十分留意する。 栗の皮のむき方は、上学年が下学年に教える。
	in 身近な地域の秋の自然に触れるとともに、学校林の管理・維持への関心を高める。	
2	水源のもり植樹祭（2月）	
	徳山東ロータリークラブ主催の植樹祭に“米泉湖緑の少年隊”として3年生以上の児童が参加し、滝の口親水公園付近の“水源のもり”に自分の名札をつけたヤマモミジなどを植樹する。	森林のもつ水源涵養機能について学年段階に応じた事前指導を行い、森林を守り育てることへの意欲を高めさせる。 植樹の仕方について米川地区環境整備協会員が指導する。
	for 自然環境を守ることに関心をもち、自分にできることを考え、行動する。	

(4) プログラムでの連携内容

(教育機関、地域、団体等での、①連携・協働先、②役割分担、③具体的な連携・協働の内容)

①連携・協働先

・米川地区教育造林振興会 ・徳山東ロータリークラブ ・米川地区環境整備協会

②役割分担

プログラムの実施にあたり、運営主体は学校であるが、米川地区教育造林振興会理事の協力の下で各プログラムを実施する。水源のもり植樹は徳山東ロータリークラブが主催し米川地区環境整備協会が指導する。

③具体的な連携・協働の内容

山菜採り遠足や栗拾いでは事前に教育造林振興会理事会を開催し、実施計画の検討や準備を行う。個々の活動の指導についても理事にお願いする。

山菜採り遠足は地域の恒例行事として、保護者はもとより地域住民の参加もある。参加する地域住民には児童の安全管理の面で協力してもらう。また、自然観察指導員に動植物の解説をお願いする。

水源のもり植樹祭においては、米川地区環境整備協会員に植樹作業の指導をお願いする。

学習指導要領との関連

1年	生活：身近な自然の観察、利用
2年	生活：生き物を育てる、成長
3年	社会：飲料水、地域の生活 理科：昆虫と植物（自然の観察、植物を育てる）
4年	社会：都道府県の様子・生活 理科：季節と生物（身近な植物の成長、季節による違い）
5年	社会：国土の自然・環境、国土保全 理科：植物の発芽、成長、結実
6年	社会：歴史上の事象、文化財 理科：生物と環境
総合的な学習	横断的・総合的な課題の学習、社会体験、討論・発表
特別学習	遠足・鑑賞、集団活動・生活

森林環境教育の視点

1 感性的経験	感性的な内容 — 森林の感覚的把握や美的把握、畏敬の念など
2 自然的特性	森林の自然的特性に関わる内容 — 植物や動物の生態など
3 多面的機能	森林と人とのかかわりに関する内容 — 森林の働き、保安林など
4 現状・課題	森林の現状に関する内容 — 森林の荒廃、人手不足など
5 管理・維持	森林の管理・維持に関する内容 — 森林整備、育成、維持、管理など
6 歴史・文化	森林とのかかわり方の歴史 — その土地での歴史、薪炭林、炭焼き

(5) 活動の分析（学習指導要領との関連または森林環境教育の視点） 上位3項目

教科・項目、視点	学習内容
2 自然的特性 生活：身近な自然の観察、利用 理科：生物と環境 植物の成長、結実 季節と生物	山菜採り遠足では、行き帰りの山道で見られる植物や野鳥などを自然観察指導員の解説から学ぶ。また、自生する山菜の採集やクイズなどを通じて多様な植物が身近にあることを理解する。 栗拾いでは、栗の様子だけでなく、ハゼノキやイノシシの足跡等から身近な動植物の生態や特徴を知り、対処法等を身につける。
3 多面的機能 社会：国土の自然・環境 飲料水	人の手によって植林され、整備された学校林と、遠足の道中に見られる自然林の違いを見て感じ取るとともに、木材生産や果樹林としての森林の役割や、「水源のもり」の果たす、水をたくわえ、長い時間をかけて流すはたらき、土の流出を木々の根が防ぐはたらきなど、森林と生活との関わりについて理解を深める。
5 管理・維持 社会：国土保全 地域の生活	学校林の目的や経緯、植林した森林を管理していくことの大変さや作業の苦労等について、教育造林振興会理事や地域住民の説明を聞くとともに、防火標語の設置や枯れ枝を集める等の整備活動、ノコギリを使った丸太切り等を通じて体験的に学ぶ。

(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)				
E S Dの要素 (生きる力)	能力	1 批判的に考える力	態度	5 他者と協力する態度
		2 未来像を予測して計画をたてる力		6 つなぐを尊重する態度
		3 多面的、総合的に考える力		7 進んで参加する態度
		4 コミュニケーションを行う力		
資質・能力 三つの柱	①生きて働く「知識・技能」の習得			
	②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成			
	③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養			
次期学習指導要領では、持続可能な開発のための教育 (E S D) 等の考え方も踏まえつつ、「生きる力」とは何かを、「資質・能力」(三つの柱)に沿って具体化するとしています。 活動を、三つの柱の項目に再整理して記載してください。(該当がない項目は空欄)				
項目	E S Dの要素(7つの能力・態度)の視点で見つめ直して、 もっとも重視する視点の内容を記載してください。			
①生きて働く「知識・技能」の習得	5 他者と協力する態度 活動のほとんどを学年単位ではなく縦割りの班編制で行うことで、周りの人に対する配慮や協力の意識の高まりを促し、よりよい人間関係づくりにつなげる。また、上学年の児童が下学年の世話を行い、下学年児童は上級生に教えられたり真似たりしながら活動に必要な知識や「生活のわざ」を伝えていく。			
②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成	4 コミュニケーションを行う力 いずれの活動においても、最後に振り返りの時間をもち、児童一人一人が活動を通して感じたことを発表するとともに、代表の児童が指導者へのお礼を述べる。お互いの感想を聞き合うことで、一人一人の感じ方や表現の仕方の違いを知り、小規模校の課題である表現力の育成やコミュニケーション能力の向上につなげる。			
③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養	6 つなぐを尊重する態度 多様な森林(スギやヒノキ、クリの学校林や地域の自然林、水源のもり)や自然環境(山道や沢の動植物、山菜)と自己の生活との関わり、お世話になる地域の人や保護者、児童同士のよりよい関わり合い方、また、伝統を受け継ぎ次代へ伝える役割を担うこと等について体験を通じて意識化させる。			
(7) 実施後、参加者の変化				
実施後の振り返りから ＜教職員＞ ・山を歩くことに不慣れだった1年生も一日の活動を通して自然に触れることの喜びを味わうことができ、帰路は難なく山道を下りました。丸太をノコギリで切る体験は達成感があつたようで、何回も挑戦していました。 ・山菜採りや栗拾いなどの体験は米川小でしかできないことと話していました。造林の方々に心を込めてお礼の手紙を書きました。 ＜児童＞ ・遠足の途中、いろいろな植物や動物が争ったような跡がありました。身近な自然について学ぶことができました。 ・防火標語を取り付けるとき、学校林の木が去年より大きくなっているようでした。何十年もかけて育った木を大切にしていきたいと思います。				
(8) プログラムの今後のめざす方向・展開				
本プログラムは、米川地域の自然環境や人材を生かした体験活動を通じて子どもたちの感性や表現力を高めるとともに、ふるさとを愛し、ふるさとに誇りをもつ子どもを育成することをめざすものである。 今後は、E S Dについて教職員や関係者の研修を重ね、E S Dの視点に立った活動の見直しを行うとともに、本年度より指定を受けたコミュニティ・スクールの仕組みを活用することで、地域とより深く連携・協力した環境教育の方策を検討していきたい。				
(9) 現状での課題、質問事項など				
米川地区は高齢化率が50%に近く、学校林の管理を担う教育造林振興会理事もほとんどが高齢者である。米川小学校の児童数も減少しつつあり、学校林の維持管理や活用のための新たな仕組み作りが求められる。 本プログラムにおける各活動は主に総合的な学習の時間や学校行事として実施している。教科の授業時数の確保に向けて行事の見直しや精選が求められており、本プログラムの各活動についても見直しが必要と考えられる。				